

## サボテンの育て方

武義高校 1年 簡井 沙代

ペット禁止のアパートで、犬や猫の代わりに私が育てているのは緋牡丹という六、七センチ程の小さなサボテンだ。棘の無い緑の柱の上にドラゴンフルーツに棘のついたようなものが乗った不思議な見た目をしており、ピンクの部分が火に似ていることからキヤンドルサボテンと呼ばれることがある。

ホームセンターでサボテンが売られているのがたまたま目に入り、スマホでサボテンの育て方を調べると、サボテンの水やりは十日に一度くらいで良いが、季節によつて置き場所を変える必要があると出てきた。そこまで難しくなさそうだと私は一番手前にあつたピンクの緋牡丹をカゴに入れた。いわゆる衝動買いというものだが、あれから四年間定期的に水をやつたり、季節の変わり目になつたら日差しの入り方を考え植木鉢を移動させたりと三日坊主な私にしては長く続いていると思う。

実は緋牡丹というのはこのピンクの部分のことだけを言い、緑の部分は三角柱というまた違う種類のサボテンだ。緋牡丹は光合成ができないため他のサボテンと繋げて育てる必要があり、三角柱はその代表例だ。三角柱が枯れると繋がつている緋牡丹も枯れてしまうので、緋牡丹は植物の実のような「子株」を残す。その子株をまた新しいサボテンに繋げることで命を繋いでいくのだ。

ある日、水やりをしようとサボテンの根元を見ると土の上に緋牡丹の子株が転がつている事に気がついた。私はこの時のために買っておいた単体の三角柱と手袋を用意し、早速子株と繋げようとカッターで三角柱の上部と子株の端を切断する。三角柱は棘が少なく切りやすかつたが、緋牡丹には棘がびっしり生えていて、切る事はできたが棘が手袋を貫通し左手の人差し指に刺さってしまった。幸い血は出ておらず、作業もあと少しなので治療を後回しにして三角柱の断面の上に子株を設置し、輪ゴムで固定する。その後、棘の刺さつた指を診てみたが、特に問題もなさそうだったのでサボテンと共にそのまま放置した。

それから二週間後の平日、子株は三角柱と無事繋がつたが、私の身体には二つほどの異変が起きていた。一つ目は、以前サボテンの棘が刺さつた人差し指が痛むことだ。あの時、棘が指に入つてしまつたのか、チクチクとした痛みがあり、しかもその痛みは日に日に増している。痛みのせいか分からぬが指が腫れてしまつていて。そして二つ目は食欲が増したことだ。食事の時、いつもの量だと誰から『足りない』と言われているような気がして、今まで朝はトースト一枚で済ましていたのに最近は三枚重ねのパンケーキをペロリと食べてしまう。そんな事が起るようになったが、指が痛い、食べる量が増えた。それだけで仕事を休むのもどうなのだろうか?私は右利きだから左が使え

なくても食事やメモを取るのには問題ないし、よく食べるようにはなったが体重は増えどころか減っている。きっと仕事に支障をきたすこともないだろう。そう思い、痛む指に包帯を巻いて荷物を纏め、サボテンに水をやつてから家を出た。子株だった緋牡丹は少しずつ、大きくなっている。

タイピングの時に人差し指が使えないのは少し不便で作業効率は下がったと思うが、これくらいなら問題ない。同僚から指の包帯について聞かれたが、「突き指した」とだけ言つた。昼食はいつもお弁当を持ってきているが、やっぱりそれだけでは足りず外にラーメンを食べに行き、昼休みギリギリに会社に戻ってきた。午後もひたすら仕事に取り組んだが、指はずつと痛むばかりだ。といえば、いつもは日焼けをするのが嫌で影を歩いたり日傘を差すのに今日は積極的に日に当たりに行っていた気がする。

仕事も終わり、家に帰ってきた。指はどうなつたのかと包帯を取つてみると、治るどころか指二本分くらいの大きさまで腫れ上がり真っ赤になつていて、軽く曲げてみると鋭い針で刺されたような激しい痛みがする。水で冷やすのが良いかとキッチンに向かうため椅子から立ち上がつたが、足に上手く力が入らず床に倒れ込んでしまつた。起きあがろうにも身体が言うことを聞かず、倦怠感に襲われると共に視界がぼんやりとしてくる。意識を失う直前も指の痛みだけはハツキリと感じていた。

病院の廊下を先輩と話しながら歩いていくと、とある人の存在が頭をよぎつた。

「そういうえば先輩、この間から入院してあるの女性。容体はどうなんですか？」

「まだ意識は戻つていないが、点滴のおかげで身体は良くなつていてるよ」

「栄養失調でしたっけ？搬送された時は大分やつれていましたよね」

「そうなんだが・・・先日、彼女のお見舞いに来ていた同僚の方が言うにはここ最近の彼女の食事量は減るどころかとても増えていたらしいぞ」

「え、なのに栄養失調？おかしくないですか？」

「それも十分変だが、実はもつとおかしな事があるんだ」

「えーっと、確かにこの辺に・・・あつた！」

そう言つと、先輩はある部屋に入つて行き、自分もそれについて行つた。  
部屋にある棚から取り出されたのは小さな箱だつた。そして、その中には赤黒く棘の生えた小さな小さな球体があつた。

「なんですか、それ？」

球体がなんなか気になり手を伸ばす。すると、思つていたより棘が鋭くて指に刺さつてしまつた。